

海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

1 9 9 7 11

目

次

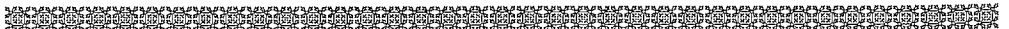
1997-11

輸入切花需要の現状と展望..... 1

データを読む

最近の世界の穀物・大豆の需給動向..... 7

海外農林業開発協力促進事業のご案内.....18



輸入切花需要の現状と展望

(社) 日本生花通信配達協会
常任顧問 鈴木 司

1. 切花輸入の経緯と動向

我が国の花き産業は、オランダ、アメリカと並ぶ三大生産国であるとともに、1億2,000万人の人口を背景とする花の大消費国で、国内産切花の全量を消費したうえに全消費量の15%（平成7年）を海外から輸入している。

輸入の経過を日本貿易月表によってみると、表-1のとおりで、昭和40年はほとんど花き球根（主にチューリップ球根）だけで切花の輸入は僅かであった。切花の輸入が増えはじめたのは昭和50年代からで、経済の本格発展に伴い国民の生活向上が顕著となった時代である。切花の輸入は、昭和28年にアメリカ（ハワイ）から僅か3万4,000円の輸入が記録されたのが最初である（日本貿易月表）。以来、昭和45年頃まで、球根（日本復帰前の沖縄）、活け花用の切葉類が輸入される程度で推移してきたが、40年代後半に入り経済の発展に伴って花の消費も増加をはじめ、国内の花生産の拡大とともに切花の輸入も急増した。当時の主な輸入切花は、台湾産キク、タイ産洋ラン、ハワイ産アンセリウムなどで、48年の輸入総量は410万本となった。この時期までオランダからの切花の輸入は皆無で、花き球根のみ輸入されていた。昭和50年代に入ると花の需要は一層拡大し、51年には輸入総数が1,000万本に達した。さらに、60年代には初の1億本台の輸入となる。この頃は世界の花の輸出王国オランダがはじめて我が国市場に登場したほか、輸出国数、種類とも飛躍的に拡大した時期である。また、南半球諸国（南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド）もこの時期から対日輸出がはじまった。また、オランダは、日本向け切花の輸出促進のため、昭和50年代にオランダ園芸協会の駐在事務所を我が国に設置して、綿密なマーケット調査を行って消費動向を十分把握したうえで輸出に踏み切

表-1 花きの種類別輸入の推移

単位 百万円

種 類	昭和 40年	45年	50年	55年	60年	平成 2年	5年	7年	8年	前年比
球 根	130	144	262	575	764	5,433	9,584	14,657	18,560	127%
樹 木 等	94	157	630	802	1,996	4,434	4,520	5,910	7,401	125
切 花	4	58	456	3,978	5,312	16,645	17,556	20,287	18,589	92
葉、枝の部分	7	54	103	333	442	1,290	1,877	3,159	4,047	128
計	235	413	1,541	5,688	8,514	27,802	33,537	44,013	48,597	110

注：球 根：チューリップ、ユリ等の花き球根

樹 木 等：ばら・植木等の苗木

葉枝の部分：ベアグラス等の切花、ルスカス、さかき等の切枝、接木用、挿木用の枝や幹

出所：大蔵省「日本貿易月表」

表-2 切花の国別輸入数量の推移

単位 百万本

国名	昭和60年	平成2年	5年	6年	7年	主な種類
タイ	55.6	107.3	104.2	118.1	121.2	ラン（デンドロビウム）
アメリカ	23.8	81.3	98.7	123.7	109.1	シダ類、ベアグラス
オランダ	3.9	49.2	89.7	96.6	113.0	キク、バラ、ユリ、チューリップ等
台湾	27.1	38.0	30.4	30.5	23.0	キク、グラジオラス
シンガポール	7.6	19.7	33.4	32.5	36.2	ラン
コスタリカ	—	16.9	11.1	13.0	16.7	シダ類
オーストラリア	0.2	12.0	27.5	42.3	56.8	ワックスフラワー、カンガルーポー
ニュージーランド	1.9	7.4	12.1	17.6	20.3	カラー、ラン、リューカデンドロン
コロンビア	—	4.6	15.2	21.7	29.2	カーネーション
南アフリカ	—	3.5	5.5	9.8	10.0	バラ
中国	—	0.0	102.5	212.6	364.3	サカキ
その他	3.3	20.8	65.2	90.0	108.2	
計	123.4	357.9	595.3	808.4	1,007.9	

出所：農林水産省農産園芸局果樹花き課（切葉、切枝を含む）

表-3 切花の種類別輸入数量の推移

単位 百万本

種類	昭和60年	平成2年	5年	6年	7年	主な輸出国
ラン類	63.2	124.2	136.6	151.0	158.3	タイ、シンガポール、ニュージーランド
キク	24.6	30.5	37.9	40.1	41.1	オランダ、台湾
カーネーション	3.3	12.9	25.2	37.9	47.2	コロンビア、オランダ、ニュージーランド
バラ	—	11.0	11.1	14.5	23.8	オランダ、インド、南アフリカ
フリジア	—	8.6	16.9	15.4	13.5	オランダ
チューリップ	—	8.2	8.5	10.1	14.1	オランダ
ユリ	—	9.6	19.7	17.8	13.9	オランダ、ニュージーランド
シダ類	17.0	52.2	80.1	104.4	114.4	アメリカ、コスタリカ
サカキ類	—	—	102.6	212.6	369.6	中国
その他	15.3	108.9	165.2	214.7	226.1	オーストラリア、アメリカ、オランダ
計	123.4	357.9	595.3	808.4	1,007.9	

出所：農林水産省資料 表-2に同じ

り、以後は強力な政府のバックアップのもとに短期間に大幅な数量拡大を果たした。

昭和60年に切花輸入が1億本を超えたことは、国内の花き生産者や市場関係者に衝撃を与えた。同年の国内総販売量（国内産出荷量＋輸入量）に占める輸入切花の割合は2.8%となった。その後の切花輸入の動きをみると、昭和62年に2億本、63年に3億本を超え、平成5年には6億本、6年に8億本を突破し、平成7年には10億本を超えた。現在輸入切花のシェアは15%に

達している。

平成年代に入っの急速な輸入切花の増加内容を表-2、表-3に示した。国別の動きをみると、オランダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドの増加が目立つ。この中で、中国が平成5年から輸出国に加わり、以後年々1億本以上数量を増強させている。

種類別にみると、年々多様な切花が登場しているが、キク、カーネーション、バラの三大切花の輸入も増加を続けており、国内生産者の注目するところである。

2. 切花輸入構造の変化

我が国の切花輸入の動きをみると、大きく三つの要因別段階に区分される。

第一期は昭和45年から60年頃の期間で、①日本で生産の難しい熱帯性の花（洋ラン、アンセリウム等）、②南半球特産の花（プロテア、カンガルーポー等）、③日本で出荷の少ない時期の花（亜熱帯地域産のキク等）が主に輸入され、この頃から普及しはじめたフラワーアレンジ用の珍しい花に需要がでてきた。

第二期は昭和60年から平成2年頃の期間で、“国際花と緑の博覧会”（花の万博）が大阪で開催され、経済の隆盛期と重った。花の消費が大きく飛躍した時期である花の万博に向けて、国、地方自治体や経済界が改めて花について目を向け、マスコミも最大限の花のキャンペーンを5年間にわたって繰り広げた効果が大きかった。国民の間でも花が身近に感じられるようになり、“母の日”等の「もの日」需要が広がった時期である。全国各地でさまざまなイベントが開かれ、企業の催事や結婚式で大量の花が使われるようになり、特に従来になく規格品の大量需要という新しい動きがでてきた。これに対し、国内市場の取引きでは十分な対応ができないこともあって、オランダの大規模市場への依存度が高まった。また、国内の花の消費は一段と多様化、周年化の傾向を強め、海外の新しい花の種類や品種の需要が増加し、新品種開発にすぐれたオランダから多様な切花の輸入が行われた。このようにオランダ等からの恒常的な花の輸入が行われるシステムが定着したことから、万一、国内産切花が天候不順などで不作を生じたとき、海外からの緊急輸入の市場体制ができ、主要切花についても国内の市場価格は今までのような急騰現象が生じなくなった。その最初の事例として、平成元年秋の天候不順による国産バラの供給不足が、オランダからの1,000万本の輸入によって補完された。以後、オランダ産バラは日本市場のシェアを継続的に確保することとなる。

第三期は平成3年以降で、花の万博は183日間に2,300万人以上の入場者を迎え、大成功を納めたが、この成果として一般の花の消費意欲がたかめられた。家庭に気軽に飾る花を手ごろな値段で買える状況の実現が一般消費者から強く求められ、農林水産省はカジュアルな花の生産、販売体制づくりを政策の重要な柱として推進しはじめた。一方、好調だった日本経済はいわゆるバブル崩壊に見舞われ、その後の不況感が続く中で従来花の需要を支えてきた企業の業務用需要の低迷を招き、高級花の需要が大幅に減少した。このように消費構造の大きな変化は、従来から高級花の販売に依存してきた花の専門小売店に対し、低価格商品の大量販売で発展してきたスーパーマーケットや量販店が相次いで花の販売に参入し、一般消費者の購買行動の変化に対応している。また、国内生産者も従来から高級花生産指向の生産構造から最近の消費構造の早い変化に十分対応できない状況が生じている。このため、国産花に比較して低価格で大量に供給可能な輸入切花が注目され、量販店をはじめとする一般消費者向けとした輸入が定着してきている。また、最近の現象として、国内産地の組織化による大都市の中央卸売市場への出

荷偏重が進み、供給の減った地方都市の市場が輸入切花の取扱いをたかめる傾向もみられる。これに対応するものとしてオランダやコロンビアに加えて、インドがバラの輸出国としてシェアを広げている。

3. 輸入切花の国内需給上の地位

我が国で生産される切花類はその全量が国内で消費され、これを上回る需要に対応し輸入が行われている。表-4に昭和60年以降の国内市場における輸入切花のシェアの推移を示した。昭和60年の輸入シェアは2.8%を占めていたが、その後、年をおってたかまり平成5年には60年の3倍を超え、平成7年には5倍を超えて15.3%を占めるに至っている。表-5に平成7年の主要な花を種類別に示した。ここでは、キク、バラが2~5%程度であるのに対し、カーネーションは7%を超え、チューリップは12%と伸びている。国内生産の少ない洋ランは84%と流通量の大半を占めている。その他の切花が25%とたかいのは、中国産のサカキ類の4億本に近い輸入の寄与率が大きく、それを除けばそのシェアはそれほど大きくない。

このような著しい輸入切花のシェアの拡大には、前述した国内の消費構造の変化とともに、為替レートの影響も大きく、急激な円高の進行が背景にある。平成8年からの円安の中で、切花の輸入が前年より大きく減少をみていることから明らかである（表-1参照）。

表-4 国内の切花流通に占める輸入切花の地位

単位 百万本

区 分	昭和60年	平成2年	5 年	6 年	7 年
国内産出荷量	4,250	5,316	5,594	5,547	5,582
輸 入 量	123	358	595	808	1,008
国内総供給量	4,373	5,674	6,189	6,355	6,590
輸入のシェア	2.8%	6.3	9.6	12.7	15.3

出所：農林水産省資料 表-2に同じ

表-5 主要な切花の国内産出荷量と輸入量（平成7年）

種 類	(A) 国内産出荷量	(B) 輸 入 量	(A+B) 国内総供給量	輸入のシェア	前年度のシェア
	百万本	百万本	百万本	%	
キ ク	2,040	41	2,081	2.0	(2.1%)
カーネーション	588	47	635	7.4	(5.8)
バ ラ	468	24	492	4.9	(3.0)
ユ リ	176	14	190	7.4	(9.8)
チューリップ	99	14	113	12.4	(50.7)
洋 ラ ン	30	158	188	84.0	(83.2)
そ の 他	2,181	710	2,841	25.0	(9.3)
全 体	5,582	1,008	6,590	15.3	9.7

出所：農林水産省資料 表-2に同じ

4. 輸入切花の生産国動向

切花の輸入拡大の中で、切花の対日輸出国は世界全域に広がり、平成7年の輸出国（地域）数は56にのぼっている。表-6は主な花の種類ごとにその輸出国を示したものである。

国別の最近の動きをみると、オランダは世界最大の輸出国であり、新品種の豊富な開発、高い品質、大規模な卸売市場を背景とした絶大な供給力は他の追随を許さない。また、我が国への輸出切花の事前検疫は他の輸出国より整った条件（後述）をもっている。しかし、近年ヨーロッパの環境に対する厳しい施策は、オランダの施設園芸のコスト上昇を招き、ヨーロッパ市場での市況の弱さと相まって切花生産に低迷が現われ、オランダ国内から南ヨーロッパ、アフリカ、東ヨーロッパ地域へ生産移転が進んでいる。ただ移転先の産地は現状では品質、安定供給の両面で多少の不安がある。

オランダに次ぐ切花輸出国コロンビアは、我が国への輸出が急増しており、平成8年からオランダと同様、現地での事前検疫が実施され、輸出環境は改善している。しかし、現地ではカーネーションのフザリウム病が発生し、生産の不安要因となるおそれがある。同国はスプレーギク、バラ、カーネーションのアメリカ向け大輸出国であり、今後、キク、バラ、アルストロメリアなどが我が国への輸出に向けられよう。

インドは、オランダに代って最も注目される新興国で、バラの大規模産地がヨーロッパの技術導入のもとに育成され、我が国への輸出でオランダを上回った。

アパルトヘイトの解除された南アフリカの花も注目され、バラ、キク、オーニソガラム等が輸出され、今後増加が見込まれる。

東南アジアではタイ、シンガポールの洋ラン、台湾のキクが古くから実績をもち、今後も輸出は継続されると見込まれる。しかし、アジア地域の経済の発展の中で地域内の需要急増の動きがあり、植物検疫や品質に厳しい我が国向け輸出力は低下することが考えられる。

オーストラリアとニュージーランドは南半球特有のプロテア、カンガルーポー、ワックスフラワーなどに加え、我が国と反対の気候条件を活かしたカーネーション、洋ラン、リンドウの輸出に力を注ぎ、我が国の市場開拓にも努力している。

中国は、現状ではサカキ類の輸出に限られ、自然林からの山採り品の今後の輸出見通しは不明である。

以上のように海外の生産国の状況をみると、それぞれ異なる要因ながら安定した供給国として不安な国もある。今後、国内の需要動向に対応して輸入切花が安定的にシェアを伸ばすためには、我が国の市場に合った花の生産を考えた海外での開発輸入について一層の努力が必要となろう。

5. 輸入切花の国内流通

我が国の切花流通は、全体の約9割が花き卸売市場を経由して小売店等に流れている。輸入切花は、輸入量の約7割が卸売市場（仲卸しも含む）を経由して販売されている。輸入切花は、本来市場のせり取り引きにはなじまない性格であり、輸入コストをふまえたユーザーとの直接取引きになじむと考えられる。しかし、輸入業者が卸売市場に依存する理由としては、個々のユーザーとの取引きは取引き単位が細分化され、経費、労力を要すること、代金清算や取引き量の不安定性などが指摘されている。卸売市場の取引きの場合でも、せり取り引き以外に予約相対取引きで円滑に行われれば計画的な輸入が容易となろう。

輸入切花は、国産切花に比べ当然流通経路は長くなり、生産国の出荷から日本の卸売市場に上場されるまでの所要日数が長くなる。平均的にみて、所要日数はオランダから4～5日、コロンビア4～6日、タイ2～3日、オーストラリアからは4～5日程度とみられる。さらに、生産地から航空便に積み込むまでに要する時間や、その間の空調施設のない状態での時間で花の鮮度に大きな差が生じてくる。また、我が国への直行便の有無によっても安定した供給国としての位置づけが異なってくるので、輸入した花がどの国の生産であるかは、鮮度、品質の面でユーザーの最も留意するところである。

6. 輸入切花の貿易制度と植物検疫

切花の輸入関税は基本税率が無税である。しかし、植物の切枝や切葉、こけ類は基本税率が5%と定められている。また、協定国は4.7%に軽減され、開発途上国などに対する特惠関税は無税となっている。

一方、植物の輸入に当って、国内への病虫害の侵入を防止するため、植物防疫法に基づく検査を受け、合格しなければ輸入はできない。また一部の地域や特定の植物は輸入禁止となっている。球根や苗木類では肉眼検査のほか一定期間の隔離栽培検査が行われる。このため、昭和60年頃からの切花や球根、野菜の輸入急増により、国際空港での検疫はパンク状態となり、その改善が内外から強く求められた。農林水産省では、植物防疫官の緊急増員、くん蒸施設等の整備を行うとともに、最大の輸出国オランダについては、平成元年から植物防疫官を現地に常駐させ我が国への輸出切花の事前検査を実施し、国内空港での検査の大幅な簡便化を図った。同様の措置をコロンビアに対しても平成8年から実施している。

7. 今後の花き産業と輸入切花の展望

我が国の花き産業は、第二次大戦後の日本経済の発展とともに拡大を続けてきたが、最近は大バブル崩壊後の景気低迷で花の需要にカゲリが現われている。しかし、各種統計によると切花を購入していない世帯数が半数以上を占めていること、年間購入回数が1世帯あたり11回に過ぎないうえ、購入数量もヨーロッパ諸国と比較してかなり少ない状況にあること、最近の国民生活の中で精神面、身体面での健康志向が強くなり、自然を象徴する花きへの関心が高まっており、今後とも花の需要拡大への期待は大きい。

農林水産省が平成7年に公表した花き・花木の需要と生産の長期見通しにおいて、平成17年における切花類の需要を、国民1人当たり消費量として平成5年の約50本から76本への増加を見込んでおり、総需要量として62億本から98億本へと約60%の伸びを予測している。このうち、国内供給可能量を86億本と見込み、差数の約12億本を輸入期待量としている。最近の輸入急増の動きからみると、この輸入量の予測値は現状ではやや過少ともみられるが、最近の円安傾向による輸入の減速、国内産地の生産構造の改善、アジア地域の需要拡大傾向などから輸入停滞も懸念されるが、総合的に検討すると、今後の輸入は、国内の需要の増加に伴って引き続き拡大するとみられるが従来のような大きな伸びは期待できず緩やかな拡大となると考えられる。

データを読む

最近の世界の穀物、大豆の需給動向

農林水産省経済局海外情報室 諏訪 実

世界の穀物需給は、年による増減はあるものの、生産量・需要量ともに着実に増加傾向で推移している。生産量の増加は、品種改良や肥料・農薬の使用に伴う単収増によるものであり、また需要量の増加は、人口の増加と畜産物消費の増大に伴う飼料穀物の需要増によるものである。

1960年代は、比較的気象条件に恵まれたこと、各国が穀物の増産に努めたこと、先進国の供給余力が大きかったことなどから、総じて過剰基調で推移した。主要輸出国は在庫縮減のため生産を抑制したが、価格は低水準で推移した。

1970年代に入ると、72年の世界的な異常気象による大幅な減産や、73年の旧ソ連による突然の大量買付けをきっかけに、需給はひっ迫に転じた。国際価格は73年から高騰し、74年も米国の干ばつや石油ショックにより高水準で推移した。このような高水準の価格により、その後、生産が刺激されたため、70年代後半の穀物需給は緩和傾向で推移した。

1980年代は、83/84年度の米国の熱波被害などにより一時的にひっ迫したものの、世界経済の低迷や、東南アジア諸国等での生産の増加により、穀物需給は過剰基調となり、国際価格は低迷した。86年に交渉が開始されたガット・ウルグアイ・ラウンド交渉は、このような世界的な過剰基調下での輸出国間の輸出競争や農業への財政支出の増大が背景となっている。しかし、88年の北米地域での大干ばつによる大幅な減産を契機として、80年代中頃の大量の在庫は減少に転じ、穀物需給は再び引き締まりの方向に転じた。

1990年代初頭は、90/91年度、92/93年度に穀物生産が消費の伸びを上回る史上最高を記録したため、穀物需給は落ち着いて推移した。

しかし、93/94年度以降は、途上国を中心とした人口増加や経済成長の著しい中国などアジアにおける畜産物消費の増大に伴う飼料穀物の需要増により、世界の穀物需要が増加傾向で推移する一方、93年夏の米国中西部の洪水、94年の豪州・中国での干ばつ、95年の米国での天候不順などの気象災害、米国・EUでの生産調整の実施、旧ソ連の市場経済移行に伴う混乱による生産減により、93/94年度から95/96年度の3年間は、消費が生産を上回って推移した。特に95/96年度は、米国の天候不順（作付期の低温・長雨、夏期の高温）による大幅な減産により、世界の生産が大きく減少したことから、期末在庫率が70年代前半のひっ迫期の水準（15%）を下回るなど、世界の穀物需給は大きく引き締まった。このため、穀物の国際価格は96年春から夏にかけて過去最高水準にまで高騰した。

その後、96/97年度は、中国で史上最高の豊作となったほか、米国・カナダ・EU・豪州・アルゼンチンなどの主要生産国でも増産となったことから、4年ぶりに生産が消費を上回った。このため97年央の在庫量・在庫率は、米国を中心にわずかながら増加したが、引き続き低い在庫水準にあり、世界の穀物需給は現在も引き締まって推移している。価格

は、96/97年度の豊作により96年秋以降下落し、現在は、大豆を除き概ね高騰前の水準に戻っている。

このような中、10月10日に米国農務省が公表した「World Agricultural Supply and Demand Estimates」によれば、今（97/98）年度の世界の穀物・大豆の需給は以下のように見通される。

○ 穀物全体

今年度（97/98年度）の世界の穀物（小麦・飼料穀物・米（精米ベース））の生産量は、米国・東欧・旧ソ連で増産となるものの、カナダ・豪州・中国で減産となることから、前年度から0.2%減の18億6,039万tと見込まれる。

消費量は、堅調な飼料需要などから、前年度比1.4%増の18億6,118万tと見込まれる。

この結果、消費量が生産量を2年振りに上回ることであり、期末在庫量は0.3%減の2億8,044万t、期末在庫率は0.3ポイント減の15.1%と見込まれる。この在庫水準は、価格が高騰した95/96年度の14.3%を上回るものの、史上2番目の低水準である。

○ 小麦

97/98年度の小麦の生産量は、干ばつに見舞われた豪州や、菜種などへの作付転換により作付面積が減少したカナダ、作付の遅れや干ばつの影響を受けたアルゼンチンで減産が見込まれるものの、冬小麦の収穫面積が拡大した米国や、作付面積が拡大し天候に恵まれた中国、前年度の干ばつからの回復が見込まれる東欧などで増産とみられることから、前年度比3.1%増の6億64万tと見込まれる。

消費量は、各国で概ね微増となるため、0.3%増の5億8,158万tと見込まれている。

期末在庫量は、17.6%増の1億2,741万t、期末在庫率が3.2ポイント増の21.9%となる見込みである。特に米国については、期末在庫量が49.9%増加し、期末在庫率も8.5ポイント増の27.7%と、在庫水準が大幅に回復する見込みである。

○ 飼料穀物

97/98年度の飼料穀物の生産量は、米国でとうもろこしの生産量が前年度並みの豊作となったほか、EU・東欧・旧ソ連で増産となったにも関わらず、前年度に史上最高の大豊作を記録した中国のとうもろこしが今年度は干ばつにより大幅な減産（約2,200万t減）となったことや、カナダ・豪州・南米各国でも減産となったことから、前年度比2.6%減の8億7,860万t（うち、とうもろこしは3.3%減の5億7,040万t）と見込まれる。

消費量は、堅調な飼料需要により米国・中国等を中心に各国で増加が見込まれることから、2.2%増の8億9,813万t（うち、とうもろこしは3.3%増の5億9,088万t）と見込まれている。

このため、期末在庫量は16.2%減の9,969万t（うち、とうもろこしは24.3%減の6,370

万t)、期末在庫率も2.4減の11.1% (うち、とうもろこしは3.9ポイント減の10.8%)と、在庫水準が大幅に低下する見込みである。世界のとうもろこしの期末在庫率10.8%は、価格の高騰した95/96年度の期末在庫率12.2%をも下回る史上最低の水準である。また、米国のとうもろこしの期末在庫率8.3%は、同じく95/96年度の5.0%に次ぐ史上2番目の低水準である。

○ 米

97/98年度の米の生産量は、中国で減産となるものの、その他のアジア各国で概ね増産となることから、前年度比0.3%増の5億6,450万t (もみベース)と見込まれる。

消費量は、中国・インド等で増加となることから、1.4%増の3億8,147万t (精米ベース)と見込まれている。

期末在庫量は、消費が生産を上回るため1.1%減の5,334万t、期末在庫率は0.3ポイント減の14.0%と見込まれている。

○ 大豆

97/98年度の大豆の生産量は、高価格を背景に作付面積が大幅に増加した米国や、大豆農家に対する融資条件が緩和されたブラジルのほか、中国など各国でも増産が見込まれることから、全体で前年度比12.1%増の1億4,724万tと見込まれる。

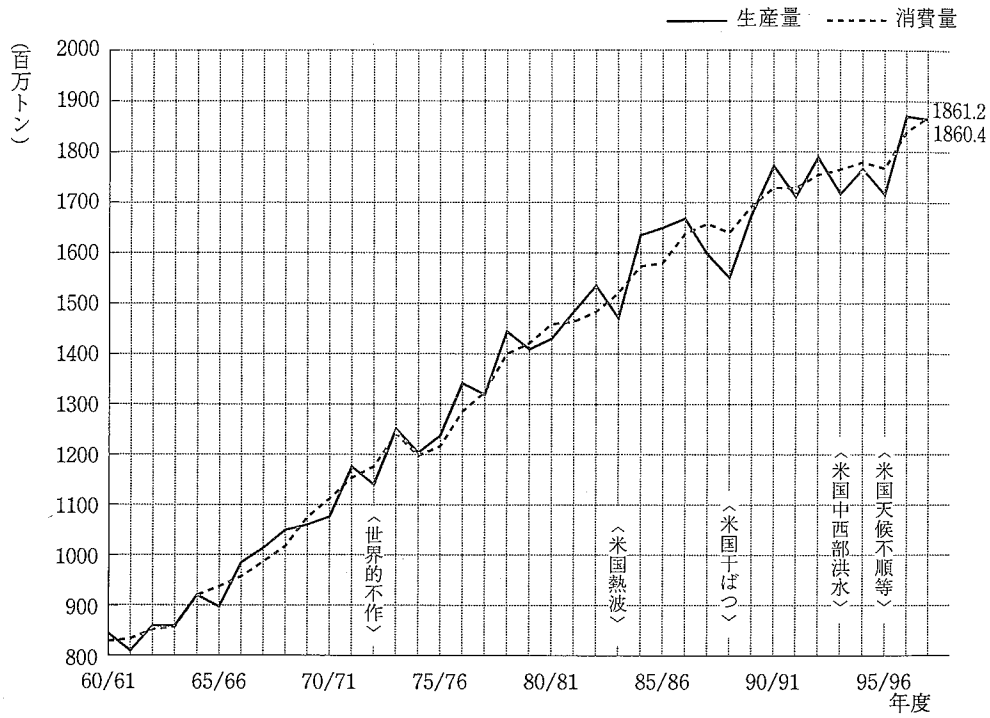
消費量は、好調な畜産需要により4.6%増の1億4,186万tと見込まれる。

期末在庫量は、生産量が消費量を上回ることから42.2%増の1,816万tとなり、期末在庫率も3.4ポイント増の12.8%まで回復する見込みである。特に米国については、現在5.4%と史上最低水準にある96/97年度末の在庫率が、来年度末には10.4%にまで回復すると見込まれている。

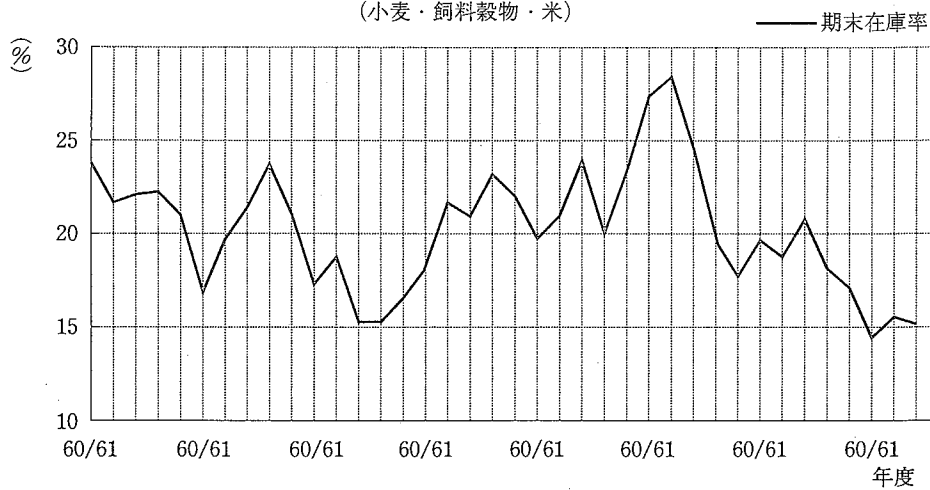
以上のように、今年度の世界の穀物・大豆の需給は、小麦と大豆について需給緩和に向かうきざしも見られるが、とうもろこしを中心とする飼料穀物の需給が再び引き締まる傾向にあることから、穀物・大豆の需給は全体として今後も引き締まって推移していくものとみられる。このようなことから、現在、世界の農業生産に大きな影響を及ぼす異常気象の原因の一つともいわれるエルニーニョ現象の発生が観測されていることもあり、今後とも、①これから大豆・小麦等の生育期を迎える南半球の主要生産国の天候状況、②収穫も終盤となった米国等北半球の主要生産国の天候・収穫動向、③主要国の需要・貿易動向、④国際価格の動き等を充分注視していく必要がある。

(注：FAOによれば、世界の安全在庫水準は、小麦については23～26%、飼料穀物約15%、米14～15%、穀物全体では17～18%とされている。)

世界の穀物需給の推移
(小麦・飼料穀物・米)



期末在庫率
(小麦・飼料穀物・米)



資料：米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(97年10月)

世界の穀物・大豆の需給動向

【穀物】

(単位: 百万トン)

項目	年度	1993/94	1994/95	1995/96	1996/97 (見込み)	1997/98	
						(予想)	前年度比
全 体							
生産量		1,712.27	1,760.97	1,708.49	1,864.70	1,860.39	△ 0.2%
消費量		1,757.65	1,773.68	1,760.93	1,834.70	1,861.18	1.4%
輸出量		202.37	216.26	203.92	204.81	207.67	1.4%
期末在庫量		316.71	303.67	251.23	281.23	280.44	△ 0.3%
期末在庫率		18.0%	17.1%	14.3%	15.3%	15.1%	△ 0.3
小 麦							
生産量		559.33	524.57	537.31	582.72	600.64	3.1%
消費量		562.44	547.64	550.29	579.77	581.58	0.3%
輸出量		100.24	98.16	95.54	96.86	95.95	△ 0.9%
期末在庫量		141.46	118.38	105.40	108.36	127.41	17.6%
期末在庫率		25.2%	21.6%	19.2%	18.7%	21.9%	3.2
飼料穀物							
生産量		797.44	871.50	799.58	901.94	878.86	△ 2.6%
消費量		836.70	859.11	840.10	878.69	898.13	2.2%
輸出量		85.66	97.11	88.88	90.07	92.77	3.0%
期末在庫量		123.84	136.23	95.70	118.95	99.69	△16.2%
期末在庫率		14.8%	15.9%	11.4%	13.5%	11.1%	△ 2.4
とうもろこし							
生産量		475.49	561.84	516.15	589.82	570.40	△ 3.3%
消費量		509.61	539.95	544.07	571.83	590.88	3.3%
輸出量		56.37	71.19	65.91	65.38	66.40	1.6%
期末在庫量		72.23	94.12	66.20	84.18	63.70	△24.3%
期末在庫率		14.2%	17.4%	12.2%	14.7%	10.8%	△ 3.9
米(精米)							
生産量(モミ)		526.47	540.25	551.38	562.98	564.52	0.3%
生産量		355.50	364.90	371.60	380.03	380.89	0.2%
消費量		358.51	366.93	370.53	376.24	381.47	1.4%
輸出量		16.47	21.00	19.51	17.88	18.96	6.0%
期末在庫量		51.41	49.06	50.13	53.92	53.34	△ 1.1%
期末在庫率		14.3%	13.4%	13.5%	14.3%	14.0%	△ 0.3

【大豆】

生産量	117.75	137.65	124.44	131.36	147.24	12.1%
消費量	120.84	131.96	131.55	135.58	141.86	4.6%
輸出量	28.18	32.16	31.949	36.981	38.571	4.3%
期末在庫量	17.34	23.70	16.72	12.77	18.16	42.2%
期末在庫率	14.3%	18.0%	12.7%	9.4%	12.8%	3.4

資料: 米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(97年10月)

「Grain/Oilseeds: World Markets and Trade」(97年10月)

注: 1) 麦は小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2) 穀物全体は、小麦、飼料穀物、米(精米)の計。

3) 期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100。

4) 年度のとり方は品目及び地域により異なる。ただし、輸出量は、小麦(7～6月)、飼料穀物(10～9月)、米(暦年)、大豆(地域により異なる)。

5) 在庫率の前年度比の欄は、前年度とポイント差。

主要国の穀物・大豆需給動向

(1) 小麦

(単位: 百万トン)

年度		93/94	94/95	95/96	96/97 (見込み)	97/98 (予想)	97/98	
項目							前年度比	シェア
生産	米	65.22	63.17	59.40	62.19	68.76	10.6%	11.4%
	カ	27.23	23.12	25.04	29.80	23.50	△21.1%	3.9%
	豪	16.48	8.90	16.50	23.59	17.00	△27.9%	2.8%
	アルゼンチン	9.70	11.30	8.60	16.10	12.70	△21.1%	2.1%
	E	82.93	84.54	86.16	99.00	95.75	△3.3%	15.9%
	U	43.50	32.10	30.10	34.90	42.00	20.3%	7.0%
	ロシア	21.83	13.86	16.27	13.50	19.00	40.7%	3.2%
	ウクライナ	11.66	9.05	6.49	7.70	9.00	16.9%	1.5%
	カナダ	30.62	33.96	34.97	26.30	34.75	32.1%	5.8%
	東アジア	814.89	179.34	190.02	194.85	211.53	8.6%	35.2%
消費	中国	106.39	99.30	102.22	110.57	121.00	9.4%	20.1%
	インド	57.21	59.84	65.47	62.62	68.70	9.7%	11.4%
	世界	559.33	524.57	537.31	582.72	600.64	3.1%	100.0%
	米	33.74	35.01	31.02	35.61	36.06	1.3%	6.2%
	E	72.18	73.78	76.65	81.12	82.74	2.0%	14.2%
	U	48.95	42.62	39.42	37.81	37.41	△1.1%	6.4%
	ロシア	19.47	15.84	16.10	16.80	16.70	△0.6%	2.9%
	ウクライナ	30.97	32.23	31.22	30.79	33.13	7.6%	5.7%
	カナダ	212.63	213.30	219.77	225.70	227.98	1.0%	39.2%
	東アジア	110.65	110.53	112.00	113.00	114.00	0.9%	19.6%
輸出	中国	56.48	57.70	63.30	65.92	67.30	2.1%	11.6%
	インド	562.44	547.64	550.29	579.77	581.58	0.3%	100.0%
	米	33.08	32.53	33.70	27.04	29.00	7.3%	30.2%
	カ	18.73	21.51	16.85	18.14	19.00	4.8%	19.8%
	豪	12.75	7.78	12.09	18.00	13.50	△25.0%	14.1%
	アルゼンチン	4.49	7.84	4.42	9.70	9.20	△5.2%	9.6%
	E	20.07	17.11	13.25	16.50	15.50	△6.1%	16.2%
	U	5.50	3.50	4.36	2.25	2.10	△6.7%	2.2%
	ロシア	0.33	2.61	4.90	0.65	2.90	343%	3.0%
	ウクライナ	1.19	1.83	0.96	1.00	1.00	0.0%	1.0%
輸入	世界	100.24	98.16	95.54	96.86	95.95	△0.9%	100.0%
	米	3.16	2.39	1.75	2.58	2.60	0.9%	2.7%
	E	5.77	6.55	5.47	5.20	5.40	3.8%	5.6%
	U	1.71	2.09	2.55	2.40	2.20	△8.3%	2.3%
	ロシア	5.00	1.88	4.99	2.00	1.00	△50.0%	1.0%
	ウクライナ	5.87	5.86	5.92	7.00	7.20	2.9%	7.5%
	カナダ	29.41	35.81	35.19	30.26	28.97	△4.3%	30.2%
	東アジア	4.31	10.24	12.52	2.80	2.00	△28.6%	2.1%
	中国	5.65	4.29	2.55	3.47	2.75	△20.6%	2.9%
	インド	2.93	3.82	3.61	4.20	4.50	7.1%	4.7%
期末在庫	日本	5.99	6.31	6.10	6.26	6.20	△1.0%	6.5%
	世界	100.24	98.16	95.54	96.86	95.95	△0.9%	100.0%
期末在庫量		141.46	118.38	105.40	108.36	127.41	17.6%	-
期末在庫率		25.2%	21.6%	19.2%	18.7%	21.9%	3.2	-

資料: 米農務省「Grain: World Markets and Trade」(97年10月)

注: 1) 小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2) 生産, 消費は各国の穀物年度による。貿易量は7~6月である。

3) 期末在庫は, 各国の穀物年度末の合計であり, 特定の時点における世界の在庫量を示すものではない。

4) EUの貿易量には域内貿易量は含まない。

5) 中国には台湾を含まない。

6) 在庫率の前年度比の欄は, 前年度とのポイント差。

(2) 飼料穀物

(単位: 百万トン)

年 度				93／94	94／95	95／96	96／97 (見込み)	97／98			
項 目								(予想)	前年度比	シ ョ ア	
生	米	ナ	国	186.45	284.89	209.44	267.56	264.34	△ 1.2%	30.1%	
	カ		ダ	24.04	23.39	24.12	27.99	24.84	△ 11.2%	2.8%	
	メ	キ	コ	22.71	20.61	23.85	26.50	26.00	△ 1.9%	3.0%	
	豪	シ	州	9.84	5.41	9.63	9.83	7.56	△ 23.1%	0.9%	
	ア	ン	ン	13.29	13.86	14.09	17.99	15.91	△ 11.6%	1.8%	
	ラ	ゼ	ル	33.76	38.22	33.24	36.99	34.81	△ 5.9%	4.0%	
	南	フ	カ	13.99	5.40	10.99	9.53	9.19	△ 3.5%	1.0%	
	E	リ	15	92.50	86.62	88.49	103.73	107.03	3.2%	12.2%	
	ロ	ー	ア	51.20	45.10	30.70	31.80	38.40	20.8%	4.4%	
	ウ	シ	イ	20.29	18.53	15.61	9.54	14.20	48.8%	1.6%	
産	東	ラ	欧	44.47	46.85	52.04	49.77	55.14	10.8%	6.3%	
	ア	ジ	計	170.24	168.36	177.23	197.36	171.88	△ 12.9%	19.6%	
	中		国	117.18	114.29	124.50	141.37	118.15	△ 16.4%	13.4%	
	イ	ン	下	31.02	30.08	26.69	33.05	32.20	△ 2.6%	3.7%	
	世	界	計	797.44	871.50	799.58	901.94	878.86	△ 2.6%	100.0%	
	消	米		国	185.86	207.90	180.12	206.51	211.96	2.6%	23.6%
		E	U	15	87.67	88.53	91.57	95.85	99.21	3.5%	11.0%
		ロ	シ	ア	54.50	43.83	35.80	32.20	34.05	5.7%	3.8%
		東		欧	45.97	47.79	48.96	49.61	52.22	5.3%	5.8%
		ア	ジ	ア	199.28	210.71	216.26	226.24	232.50	2.8%	25.9%
中			国	108.70	117.05	122.28	130.93	137.88	5.3%	15.4%	
世		界	計	836.70	859.11	840.10	878.69	898.13	2.2%	100.0%	
輸	米	ナ	国	40.04	65.67	58.66	52.53	57.88	10.2%	62.4%	
	カ		ダ	5.64	4.36	4.24	5.53	5.25	△ 5.0%	5.7%	
	豪		州	4.95	1.49	4.28	4.36	2.46	△ 43.6%	2.7%	
	ア	ン	ン	4.86	6.31	7.82	10.90	8.80	△ 19.3%	9.5%	
	南	ゼ	ル	3.01	2.58	1.81	2.20	0.50	△ 77.3%	0.5%	
	E	フ	カ	10.08	8.11	4.44	7.85	8.70	10.8%	9.4%	
	東	リ	15	0.40	1.20	2.80	1.50	2.70	80.0%	2.9%	
	中	ー	ア	12.04	1.60	0.25	4.05	2.53	△ 38 %	2.7%	
	世	界	計	85.66	97.11	88.88	90.07	92.77	3.0%	100.0%	
輸	米	キ	国	4.60	3.12	2.39	3.28	2.90	△ 11.5%	3.1%	
	メ		コ	4.87	5.83	8.49	5.16	6.16	19.4%	6.6%	
	ロ	シ	ア	3.16	0.81	0.86	0.60	0.45	△ 25.0%	0.5%	
	E	ー	15	2.73	4.65	4.26	2.58	2.88	11.7%	3.1%	
	サ	ウ	・	5.58	3.93	3.89	7.05	7.30	3.5%	7.9%	
	ア	ジ	ア	37.61	47.79	43.46	41.49	43.22	4.2%	46.6%	
	中		計	1.32	6.37	2.96	2.13	2.55	20.0%	2.7%	
	台		湾	5.89	6.62	6.03	5.84	5.20	△ 11.0%	5.6%	
	韓		国	5.78	8.97	10.14	8.95	9.30	3.9%	10.0%	
	日		本	21.20	21.10	20.28	20.22	20.47	1.2%	22.1%	
入	世	界	計	85.66	97.11	88.88	90.07	92.77	3.0%	100.0%	
	期	末	在	123.84	136.23	95.70	118.95	99.69	△ 16.2%	—	
期	末	在	14.8%	15.9	11.4%	13.5	11.1%	△ 2.4	—		

資料: 米国農務省「Grain: World Markets and Trade」(97年10月)

注: 1) とうもろこし, 大麦, ソルガム, えん麦, ライ麦, ミレット, ミックスグレインを含む。

2) 生産, 消費は各国の穀物年度による。貿易量は10~9月である。

3) 期末在庫は, 各国の穀物年度末の合計であり, 特定の時点における世界の在庫量を示すものではない。

4) EUの貿易量には域内貿易量は含まない。

5) 中国には台湾を含まない。

6) 在庫率の前年度比の欄は, 前年度とのポイント差。

(2)-a とうもろこし

(単位: 百万トン)

年度		93/94	94/95	95/96	96/97 (見込み)	97/98 (予想)	97/98	
項目							前年度比	シェア
生産	米カ	160.95	256.62	187.31	236.06	236.53	0.2%	41.5%
	メ	6.50	7.04	7.27	7.20	6.90	△ 4.2%	1.2%
	ナ	19.14	17.01	17.78	19.50	19.50	0.0%	3.4%
	シ	10.00	11.36	11.10	14.70	13.00	△11.6%	2.3%
	ン	32.93	37.44	32.48	36.16	34.00	△ 6.0%	6.0%
	チ	13.28	4.85	10.20	9.01	8.50	△ 5.7%	1.5%
	ル	30.56	28.46	29.22	34.63	36.43	5.2%	6.4%
	ラ	20.17	22.72	25.37	25.72	28.53	10.9%	5.0%
	フ	8.93	4.04	7.01	4.82	7.74	60.3%	1.4%
	ー	130.20	130.23	142.37	158.42	135.40	△14.5%	23.7%
消費	東	102.70	99.28	112.00	127.47	105.00	△17.6%	18.4%
	旧	9.60	9.12	9.44	10.10	10.00	△ 1.0%	1.8%
	ソ	475.49	561.84	516.15	589.82	570.40	△ 3.3%	100.0%
	ア	159.82	183.58	159.89	179.29	187.97	4.8%	31.8%
	中	20.48	20.25	23.16	23.30	24.00	3.0%	4.1%
	イ	33.25	36.16	36.78	37.51	35.80	△ 4.6%	6.1%
	日	32.07	32.34	32.77	35.24	36.38	3.2%	6.2%
	世	21.03	22.19	22.95	24.38	25.47	4.5%	4.3%
	界	153.05	163.99	173.88	180.41	187.66	4.0%	31.8%
	本	92.90	99.65	108.05	115.25	122.25	6.1%	20.7%
輸出入	計	9.55	9.12	9.44	10.10	10.00	△ 1.0%	1.7%
	米	16.45	16.45	16.08	15.65	15.50	△ 1.0%	2.6%
	南	509.61	539.95	544.07	571.83	590.88	3.3%	100.0%
	ア	33.15	58.65	52.68	46.00	51.50	12.0%	77.6%
	ラ	4.23	6.05	6.95	10.00	8.00	△20.0%	12.0%
	ゼ	3.01	2.53	1.64	2.20	0.50	△77.3%	0.8%
	ン	1.72	0.35	0.34	0.40	0.40	0.0%	0.6%
	チ	11.80	1.41	0.23	4.00	2.50	△37.5%	3.8%
	リ	56.37	71.19	65.91	65.38	66.40	1.6%	100.0%
	国	0.48	0.22	0.40	0.28	0.25	△ 9.1%	0.4%
輸出入	計	1.13	1.69	0.16	0.40	1.25	212.5%	1.9%
	米	1.69	3.17	6.38	3.00	4.00	33.3%	6.0%
	ブ	2.14	2.59	2.23	3.00	3.00	0.0%	4.5%
	メ	2.34	3.83	2.97	2.25	2.25	0.0%	3.4%
	エ	2.76	0.22	0.10	0.20	0.10	△50.0%	0.2%
	ロ	30.61	39.98	36.20	34.38	35.20	2.4%	53.0%
	ア	0.00	4.29	1.48	0.08	0.25	233.3%	0.4%
	中	5.32	6.29	5.73	5.60	5.00	△10.7%	7.5%
	台	5.70	8.22	8.96	8.50	8.75	2.9%	13.2%
	韓	1.98	2.42	2.34	2.40	2.70	12.5%	4.1%
在庫	マ	16.17	16.48	15.98	15.50	15.50	0.0%	23.3%
	日	56.37	71.19	65.91	65.38	66.40	1.6%	100.0%
	世	72.23	94.12	66.20	84.18	63.70	△24.3%	-
	界	14.2%	17.4%	12.2%	14.7%	10.8%	△ 3.9	-
	期							
	末							
	在							
	庫							
	量							
	率							

資料: 米国農務省「Grain: World Markets and Trade」(97年10月)

注: 1) 生産, 消費は各国の穀物年度による。貿易量は10~9月である。

2) 期末在庫は, 各国の穀物年度末の合計であり, 特定の時点における世界の在庫量を示すものではない。

3) EUの貿易量には域内貿易量は含まない。

4) 中国には台湾を含まない。

5) 在庫率の前年度比の欄は, 前年度とのポイント差。

(3) 米

(単位: 百万トン)

年度		93/94	94/95	95/96	96/97 (見込み)	97/98 (予想)	前年度比	シェア
項目								
生産 ハもみV	米ブルジョール	7.08	8.97	7.89	7.77	8.14	4.7%	1.4%
	豪Eラ	10.52	10.89	10.05	9.75	9.56	△ 1.9%	1.7%
	アUジ	1.08	1.14	0.95	1.41	1.19	△ 15.5%	0.2%
	中イババミタベ	1.97	2.04	1.98	2.52	2.46	△ 2.2%	0.4%
	イババミタベ	478.19	488.58	501.79	512.20	513.99	0.3%	91.0%
	中イババミタベ	177.70	175.93	185.21	195.10	194.29	△ 0.4%	34.4%
	イババミタベ	120.46	121.75	119.44	120.82	122.26	1.2%	21.7%
	イババミタベ	5.99	5.17	5.91	6.39	6.45	0.9%	1.1%
	イババミタベ	27.06	25.25	26.53	27.63	27.75	0.4	4.9%
	イババミタベ	15.09	16.00	17.00	15.52	16.55	6.7%	2.9%
	イババミタベ	19.20	21.40	21.80	20.76	21.21	2.2%	3.8%
	イババミタベ	24.32	24.62	26.79	27.27	27.27	0.0%	4.8%
消費 ハ精米V	米ブルジョール	46.64	49.74	51.10	50.62	51.23	1.2%	9.1%
	豪Eラ	9.79	14.98	13.44	12.93	12.36	△ 4.4%	2.2%
	アUジ	526.47	540.25	551.38	562.98	564.52	0.3%	100.0%
	中イババミタベ	3.32	3.34	3.42	3.34	3.52	5.1%	0.9%
	イババミタベ	1.79	1.82	1.91	1.96	1.91	△ 2.8%	0.5%
	中イババミタベ	320.64	326.22	330.57	334.77	340.24	1.6%	89.2%
	イババミタベ	128.00	129.00	130.00	132.07	135.00	2.2%	35.4%
	イババミタベ	76.05	77.31	78.00	79.50	80.50	1.3%	21.1%
	イババミタベ	18.30	17.78	18.34	18.52	18.70	1.0%	4.9%
	イババミタベ	8.30	8.70	9.60	9.00	9.50	5.6%	2.5%
	イババミタベ	13.83	13.95	14.58	14.75	14.50	△ 1.7%	3.8%
	イババミタベ	32.28	34.01	33.69	34.30	35.20	2.6%	9.2%
輸出 ハ精米V	米ブルジョール	9.40	9.35	9.30	9.25	9.20	△ 0.5%	2.4%
	豪Eラ	358.51	366.93	370.53	376.24	381.47	1.4%	100.0%
	アUジ	2.79	3.07	2.62	2.50	2.80	12.0%	14.8%
	中イババミタベ	0.57	0.52	0.48	0.70	0.65	△ 7.1%	3.4%
	イババミタベ	0.19	0.32	0.30	0.35	0.35	0.0%	1.8%
	中イババミタベ	0.60	4.20	3.56	1.50	1.50	0.0%	7.9%
	イババミタベ	1.40	1.59	1.66	1.65	1.70	3.0%	9.0%
	イババミタベ	0.62	0.65	0.27	0.03	0.10	300.0%	0.5%
	イババミタベ	4.74	5.93	5.28	4.80	5.25	9.4%	27.7%
	イババミタベ	2.22	2.31	3.10	3.25	3.50	7.7%	18.5%
	イババミタベ	16.47	21.00	19.51	17.88	18.96	6.0%	100.0%
	イババミタベ	0.24	0.22	0.27	0.35	0.35	0.0%	1.8%
輸入 ハ精米V	米ブルジョール	1.10	0.99	0.80	1.00	1.00	0.0%	5.3%
	豪Eラ	0.73	0.76	0.90	0.65	0.70	7.7%	3.7%
	アUジ	0.65	1.63	1.35	1.00	1.00	0.0%	5.3%
	中イババミタベ	0.70	0.62	0.75	0.75	0.70	△ 6.7%	3.7%
	イババミタベ	5.60	8.90	6.28	4.89	5.72	16.8%	30.2%
	中イババミタベ	0.70	1.96	0.85	0.60	1.00	66.7%	5.3%
	イババミタベ	0.05	0.68	0.35	0.30	0.25	△ 16.7%	1.3%
	イババミタベ	0.00	0.28	0.90	0.90	1.00	11.1%	5.3%
	イババミタベ	0.18	1.57	0.70	0.10	0.10	0.0%	0.5%
	イババミタベ	1.12	3.01	1.23	0.75	1.00	33.3%	5.3%
	イババミタベ	2.47	0.03	0.45	0.60	0.65	8.3%	3.4%
	イババミタベ	16.47	21.00	19.51	17.88	18.96	6.0%	100.0%
期末在庫量		51.41	49.06	50.13	53.92	53.34	△ 1.1%	—
期末在庫率		14.3%	13.4%	13.5%	14.3%	14.0%	△ 0.3	—

資料: 米農務省「Grain: World Markets and Trade」(97年10月)

注: 1) 生産はもみベース, 他は精米ベース。

2) 生産, 消費は各国の穀物年度による。貿易量は暦年(96/97年度では97年)。

3) 期末在庫は, 各国の穀物年度末の合計であり, 特定の時点における世界の在庫量を示すものではない。

4) 中国には台湾を含まない。

5) 在庫率の前年度比の欄は, 前年度とのポイント差。

(4) 大豆

(単位: 百万トン)

年度		93/94	94/95	95/96	96/97 (見込み)	97/98 (予想)	97/98	
項目							前年度比	シェア
生産	米	50.92	68.49	59.24	64.84	74.08	14.3%	50.3%
	ブラジル	24.70	25.90	23.70	26.50	28.00	5.7%	19.0%
	アルゼンチン	12.40	12.50	12.43	11.50	14.20	23.5%	9.6%
	パラグアイ	1.80	2.20	2.40	2.60	2.70	3.8%	1.8%
	EU	0.81	1.03	0.94	1.15	1.44	25.1%	1.0%
	中国	15.31	16.00	13.50	13.22	13.50	2.1%	9.2%
	世界中	4.00	3.24	4.48	4.10	4.50	9.8%	3.1%
計		117.75	137.65	124.44	131.36	147.24	12.1%	100.0%
消費	米	37.33	42.40	40.32	42.52	44.32	4.2%	31.2%
	ブラジル	20.10	21.79	23.17	21.47	21.80	1.5%	15.4%
	アルゼンチン	9.20	9.09	10.81	11.45	12.40	8.3%	8.7%
	EU	13.58	16.35	15.01	16.06	16.18	0.7%	11.4%
	中国	NA	15.76	14.07	15.22	16.30	7.1%	11.5%
	世界中	5.01	5.04	4.97	5.08	5.08	0.0%	3.6%
	計	120.84	131.96	131.55	135.58	141.86	4.6%	100.0%
輸出	米	16.03	22.81	23.17	24.00	26.13	8.8%	67.7%
	ブラジル	5.43	3.57	3.45	8.00	7.35	△ 8 %	19.1%
	アルゼンチン	3.07	2.50	2.09	0.75	1.50	100.0%	3.9%
	パラグアイ	1.20	1.45	1.60	1.65	1.68	1.5%	4.3%
	EU	1.10	0.39	0.22	0.20	0.20	0.0%	0.5%
	中国	28.18	32.16	31.95	36.98	38.57	4.3%	100.0%
	計							
輸入	米	0.18	0.14	0.12	0.27	0.14	△ 50.0%	0.4%
	メキシコ	2.20	1.87	2.40	3.06	3.10	1.2%	8.0%
	EU	12.87	15.70	14.00	14.84	14.80	△ 0.3%	38.4%
	アジア	10.25	10.65	11.77	13.55	14.61	7.8%	37.9%
	中台韓日	0.13	0.16	0.80	2.20	3.00	36%	7.8%
	世界中	2.50	2.60	2.65	2.37	2.50	5.3%	6.5%
	計	1.16	1.38	1.42	1.60	1.55	△ 3.1%	4.0%
期末在庫量		4.86	4.84	4.78	5.00	4.85	△ 3.0%	12.6%
計		28.37	32.81	32.08	36.25	38.59	6.4%	100.0%
期末在庫量		17.34	23.70	16.72	12.77	18.16	42.2%	—
計		0.14	0.18	0.13	0.09	0.13	3.4	—

資料: 米農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(97年10月)
「Oilseeds: World Markets and Trade」(97年10月)

- 注: 1) 大豆かすは含まない。
2) 年度の取り方は各国の作物年度による。ただし、ブラジル、アルゼンチンは、10～9月に調整している。
3) 期末在庫は、各国の作物年度末の合計であり、特定の時点における世界の在庫量を示すものではない。
4) EUの貿易量には域内貿易量は含まない。
5) 中国には台湾を含まない。
6) 在庫率の前年度比の欄は、前年度とのポイント差。

(参考) 米国の穀物・大豆の需給動向

【穀物】

(単位: 百万トン)

項目	年度	1993/94	1994/95	1995/96	1996/97 (見込み)	1997/98	
						(予想)	前年度比
全 体							
生産量		256.91	354.70	274.47	335.4	338.96	1.1%
消費量		222.92	246.26	214.56	245.46	251.53	2.5%
輸出量		76.28	98.11	99.47	81.13	90.12	11.1%
期末在庫量		43.72	60.18	25.49	39.99	43.17	7.9%
期末在庫率		14.6%	17.5%	8.1%	12.2%	12.6%	0.4
小 麦							
生産量		65.22	63.17	59.40	62.19	68.76	10.6%
消費量		33.74	35.01	31.02	35.61	36.06	1.3%
輸出量		33.41	32.34	33.78	27.25	29.26	7.3%
期末在庫量		15.47	13.79	10.23	12.07	18.10	49.9%
期末在庫率		23.0%	20.5%	15.8%	19.2%	27.7%	8.5
飼料穀物							
生産量		186.45	284.89	209.44	267.56	264.34	△ 1.2%
消費量		185.86	207.90	180.12	206.51	211.96	2.6%
輸出量		40.34	62.43	63.00	51.38	58.09	13.0%
期末在庫量		27.38	45.34	14.44	27.03	24.29	△10.1%
期末在庫率		12.1%	16.8%	5.9%	10.5%	9.0%	△ 1.5
とうもろこし							
生産量		160.95	256.62	187.31	236.06	236.53	0.2%
消費量		159.82	183.58	159.89	179.29	187.97	4.8%
輸出量		33.74	55.31	56.59	45.47	51.44	13.1%
期末在庫量		21.60	39.57	10.82	22.46	19.83	△11.7%
期末在庫率		11.2%	16.6%	5.0%	10.0%	8.3%	△ 1.7
米(精米)							
生産量(モミ)		7.08	8.97	7.89	7.77	8.14	4.7%
生産量		5.24	6.65	5.63	5.60	5.86	4.7%
消費量		3.32	3.34	3.42	3.34	3.52	5.1%
輸出量		2.52	3.34	2.69	2.50	2.78	11.3%
期末在庫量		0.87	1.05	0.81	0.89	0.77	△13.0%
期末在庫率		14.8%	15.7%	13.3%	15.2%	12.2%	△ 2.9

【大豆】

生産量	50.92	68.49	59.24	64.84	74.08	14.3%
消費量	37.33	42.40	40.32	42.52	44.32	4.2
輸出量	16.03	22.81	23.17	24.00	26.13	8.8%
期末在庫量	5.69	9.11	4.99	3.58	7.35	105.1%
期末在庫率	10.7%	14.0%	7.9%	5.4%	10.4%	5.0

資料: 米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「Grain/Oilseeds: World Markets and Trade」

注: 1) 麦は小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

2) 穀物全体は、小麦、飼料穀物、米(精米)の計。

3) 期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量)×100。

4) 年度は、小麦(6~5月), とうもろこし(9~8月), 米(8~7月), 大豆(9~8月)。

5) 在庫率の前年度比の欄は、前年度とのポイント差。

海外農林業開発協力促進事業



(社)海外農業開発協会は昭和50年4月、我が国の開発途上国などにおける農業の開発協力を寄与することを目的として、農林水産省・外務省の認可により設立されました。

以来、当協会は、民間企業、政府および政府機関に協力し、情報の収集・分析、調査・研究、事業計画の策定、研修員の受入れなどの事業を積極的に進めております。

また、国際協力事業団をはじめとする政府機関の行う民間支援事業（調査、融資、専門家派遣、研修員受入れ）の農業部門については、会員を中心とする民間企業と政府機関とのパイプ役としての役割を果たしております。

海外農林業開発協力促進事業とは

多くの開発途上国では、農林業が重要な経済基盤の一つになっており、その分野の発展に協力する我が国の役割は大きいといえます。そのさい、当協会では、経済的自立に必要な民間部門の発展を促すうえで、政府間ベースの開発援助に加え、我が国民間ベースによる農業開発協力の推進も欠かせないとの見地から、昭和62年度より農林水産省の補助事業として「海外農林業開発協力促進事業」を実施しております。

当補助事業は、今日までの実施の過程で、開発途上国における農林産物の需要の多様化、高度化等を背景とする協力ニーズの変化および円滑な情報管理・提供に対応するための拡充を行い、現在は次の3部門を柱としております。

1. 優良案件発掘・形成事業（個別案件の形成）

農業開発ニーズ等が認められる開発途上国に事業計画、経営計画、栽培などの各分野の専門家で構成される調査団を派遣して技術的・経済的視点から開発事業の実施可能性を検討し、民間企業による農林業開発協力事業の発掘・形成を促進します。

民間ベースの開発途上国における農林業開発事業の企画・立案に関して、対象国の農林業開発、地域開発、外貨獲得、雇用創出、技術移転などの推進に寄与すると期待される場合、有望作物・適地の選定、事業計画の策定などに必要な現地調査を行います。

相談窓口



⇒⇒ 民間ベースの農林業投資を支援

2. 地域別民間農林業協力重点分野検討基礎調査（農業投資促進セミナーの開催）

農業投資の可能性が高いと見込まれる地域に調査団を派遣して対象地域の農業事情、投資環境、社会経済情勢を把握・検討し、検討結果に基づく農業開発協力の重点分野をセミナーなどを通じて民間企業に提示します。

セミナーでは、農業投資を検討する上で必要となる基礎的情報とともに、現地政府関係機関および業界各方面から提出された合弁希望案件を紹介します。本年度は、中国南部地域（雲南省、広西壮族自治区）を対象に、平成10年3月に開催の予定です。

昨年までに、①インドネシア、②ベトナム、③中国揚子江中下流域、④中国渤海湾沿岸地域、⑤中国揚子江上流域を対象にセミナーを開催しました。

3. 海外農林業投資円滑化調査（情報の提供と民間企業参加による現地調査）

海外投資事業に関心を持つ企業の投資動向アンケート調査および投資関連情報の整備・提供を行うとともに、主に海外事業活動経験の少ない企業などを対象に、関心の高い途上国へ調査団を派遣し、当該国の農業開発ニーズ、農業生産環境などを把握します。

業界の団体、あるいは関係企業などの要望に沿った現地調査を企画し、協会職員が同行します（毎年度1回）。現地調査では、現地側の企業ニーズ、投資機関などの開発ニーズを把握するとともに、事業候補地の調査および現地関係者との意見交換などを行います。参加にあたっては、実費（航空賃、宿泊費、食費等）の負担が必要ですが、通訳・車両用上などの調査費用は協会が負担します。

また、アンケートおよび本調査の結果概要をはじめとする投資関連情報を提供するため、季刊誌を発行しています。

⇒⇒ (社)海外農業開発協会
第一事業部
TEL: 03-3478-3509

農林水産省
国際協力計画課事業団班
TEL: 03-3502-8111 (内線2849)

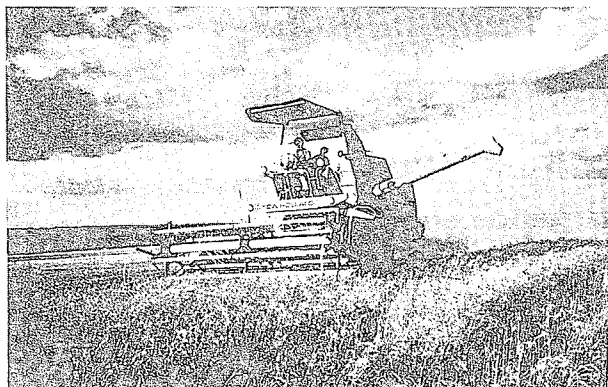
総合農業雑誌

アグロ・ナッセンテ

AGRO-NASCENTE

ブラジルで発行されている

日本語の農業雑誌!!



南米の農業が

次第に注目されてきました。

従来のコーヒー、カカオ、オレンジ、大豆などの他に、熱帯から温帯までの多くの作物が生産されるようになったからです。

南米の農業情報は、日本語唯一の専門誌「アグロ・ナッセンテ」誌で—

EDITORIA AGRO-NASCENTE S.A.
R. Miguel Isasa, 536 - 1º - S/ 13, 14, 15
CEP 05426 São Paulo Brasil

(日本でのお申込み先)

日伯毎日新聞社東京支局
東京都港区三田 2-14-7
ローレル三田503号
Tel. : 03(3457)1220

海外農業開発 第235号

1997. 11. 15

発行人 社団法人 海外農業開発協会 橋本栄一 編集人 仁科雅夫

〒107 東京都港区赤坂8-10-32 アジア会館

T E L (03) 3478-3508 F A X (03) 3401-6048

定価 300円 年間購読料 3,000円 送料別

印刷所 日本印刷(株)(3833)6971

M・トダロの 開発経済学

ECONOMIC DEVELOPMENT

SIXTH EDITION
Michael P. Todaro



- ◎監訳
岡田靖夫
(横浜国立大学大学院教授)
- ◎日本語版訳
OCDI開発経済研究会
- ◎上製本/A5判960ページ
- ◎定価=本体7000円+税

開発経済学の世界的名著——待望の日本語版

開発はゼロサム ゲームではない

勝者も敗者もない公平な国際経済の
構築には何が必要か

農村から都市への人口移動モデルとして“トダロのパラドックス”を提唱したマイケル・トダロが途上国の窮状に焦点を合わせ、開発経済の問題点と見通しにアプローチする。

多角的な構成で、問いかけ、考える
演習に最適のテキスト

- ★10カ国語で翻訳され、40カ国以上でテキストとして活用
- ★20カ国の事例研究と8カ国を対象とした比較事例研究
- ★各章末には『復習のための概念』と『討議のための例題』
- ★600語を超える用語解説と150点を超える豊富な図表

* 内容詳細はリーフレットをご請求ください

貧困と人間開発

UNDP「人間開発報告書 1997」

貧困の撲滅は可能である

貧困とは所得の低さだけでなく、寿命、健康、住居、知識、社会への参加、個人の安全保障など、人間らしい生活を送るための基本的能力の剥夺状態である。本書では人間貧困指数(HPI)を導入し、このグローバルな挑戦を検証する。



- ◎日本語監修
広野良吉(成蹊大学教授)
恒川恵市(東京大学教授)他
- ◎B5判/260ページ
- ◎定価=本体3800円+税

ODA最前線

国際協力専門家 その素顔

顔が見えるODAを探る

開発援助のために途上国各地で、技術協力に取り組む派遣専門家たち。その数は年間3000人にのぼり、専門分野も多岐にわたる。国際派ジャーナリスト青木公が徹底取材により克明に描くかれらの実態と人間ドラマ。

『甦る大地セラード』『一万人の国際大学』につづく著者好評シリーズの第三弾。



青木公 著

- ◎四六判/264ページ
- ◎定価=本体1800円+税



国際協力出版会

〒162 東京都新宿区市谷本村町42番地 経済協力センタービル別館5F
TEL.03-3354-8571 FAX.03-3354-8570

海外農業開発

第 235 号

第3種郵便物認可 平成9年11月15日発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEW